

愛媛県東温市則之内(すのうち)窯跡陶磁片調査報告

第1章 はじめに

平成27(2015)年5月27日に、東温市教育委員会のご厚意で、東温市窯跡関連陶磁器資料(三軒屋、則之内、志津川)を実見させてもらい、同年6月9日から12月16日までの間、何度か同教委に出向き、全資料の熟覧・登録、主要資料の実測・写真撮影を実施した。

その後、令和元(2019)年度から実測図と遺物写真の整理を始め、その後、ドローイング工房クラフトマンでデジタルトレースとデジタル合成を行い、プレートの作成、原稿執筆を経て、令和6(2024)年3月31日ようやくレポートの完成にこぎつけた。

また、令和5(2023)年3月1日と12月23日に現地踏査を行い、本報告執筆の参考とした。

第2章 則之内窯跡の歴史

第1節 先行研究

則之内窯の歴史に関する先行研究としては、永田政章著「伊予の陶芸(五)松瀬川焼研究 その二」『愛媛の文化 第5号』財団法人 愛媛県文化財協会 昭和42年3月25日発行(以下「伊予の陶芸(五)」と略)と吉田忠明著「愛媛の焼き物 則之内焼 平成七年七月 財団法人 愛媛文華館」(以下「愛媛のやきもの」と略)がある。

「伊予の陶芸(五)」には、砥部町立窯業試験場長を務め、砥部焼研究者としても著名な酒井如雲氏(1884-1958)の覚書「陶片僕」に則之内窯に関する記述が転載されている。

(イ) 須之内窯、三軒家窯の一情報

当時の細工習い大内浅吉の談(昭和十年三月十八日)当時七十四才

「私は約六十年前(明治八、九年の頃?)九谷(坂本村久谷の誤りであろう)の人三好照治の弟子として須ノ内へ行った。三好は白瀧秀三郎の弟子で白瀧の世話で弟子入りしたのであった」

「三好照治は大物を作るに得意であった。当時三好はその地方安国寺の住職の出資にて須ノ内で窯を焼いていた。職工津吉(津吉村)の元助、宮内(宮内村)の熊蔵。画工、七折(七折村)小笠原の富さん。渡部歌治など記憶に残っている。一二年の後、三好は須之内を去って三軒屋に新窯を開いた。これは松山藩士某の出資であった。五年の年期奉公で行った。私は三軒屋窯の築窯から手伝うたが年期二年足らずを残して逃げ帰ったが、三好の抗議のため、砥部で細工が出来ず。一時土佐(尾土焼か能佐山焼?)へ行っていたが、后仲裁する人あり、三十何円かの金を三好へ出して、円満に三好と師弟の約を解いた」

「三好の須ノ内を去ったのは、その妻女○○○○○○○○○○○○○○非行あり、三好は安国寺を笠に(事情知ってか知らずにか)横暴なることあり。村民に排斥せられたるものである。后須之内へは砥部の木下栄信さん等が行って暫く焼いた。三好の須ノ内窯は従来の窯でなく新窯を築いたものである」

(ロ) 須ノ内窯の一情報 白瀧勝市氏談

明治初年、白瀧勝市の父秀三郎は千両富くじが当たったので、その金を以て、以前松山藩の御用窯で当時廃窯になっていた。須ノ内八幡下の窯を焼いたが、従事すること五、六年廃藩による藩札下落に起因する大不景気の襲来に、遂に失敗して砥部に帰ったというから、恐らく中止したのは(明治)七・八年頃ならん。

窯の終期頃、窯積みはした、松割木は一本もなし、窯焚高須重蔵が「白瀧さん割木はどうするな」といえば、秀三郎は割木一本堤えて八幡宮へ祈願したということで、之を見た人々は今神様を拜んでも割木は出て来まいと等と冷笑したという。(須之内焼原料は下林石及クオー石。)

「愛媛の焼き物」には、伊予史談会(1914)の創設者西園寺源透氏の著作から以下二カ所が引用されている。

「伊予の陶器」(松山大学 富永文庫蔵)

則ノ内焼

一、字保免ニカマアリ。永(恵)雲神社ノ表ニアリ。上リガマ也。長サ二十間計アリ。

一、安国寺ノ西側ノ谷、井内川ニ沿フ。

「烟霞」第一号(松山楽陶会発行)

則之内焼

幕末頃松山藩の家老奥平氏の創業に係わったもので、主として雅致あるものを製り、特に藍絵等の雅趣に富んだ作品を残して居ります。

第2節 窯跡

「愛媛の焼き物」には吉田氏が窯跡を踏査した時の記録が記されている。

国道十一号線を西条から松山方面へ向かって行くと、川内町役場の少し手前に「愛媛県立林業試験場」の看板が見えてくる。

その看板の立っている細い道を山手に行くと空き地に続いて畑があり、その奥に桧や杉の林がある。

この林の地面を見ると、生い茂った雑草の中に溶けた釉薬が厚く付着したトンバリや窯道具の破片が無数にみられる。

山の斜面の一部には赤土が焼硬まって一見して窯床と考えられる場所がある。ここに則之内の窯があった。

焼けた土の見られる範囲や周囲の地形などを総合的に考えて、四・五室の登り窯が築かれていたようだ。

山の斜面を掘ると、陶片が出てくる場所があるが、出土するのは染付の茶碗や小皿の破片ばかりである。

染付の呉須に改良呉須が使われており、発色は鮮明で、描かれた文様は走り書き程度の簡単なものが多い。

また、印判手の文様も多い。

窯跡は、同地に植林する際、完全に破壊されたようである。また、物原は、大正四年ごろに窯場近くに建設された水力発電所の工事の際、撤去されたと言われており、窯場の近くには、あまり磁器の破片は見られない。

この地には、以前、三島神社の社殿があったが、現在社殿は焼失し、礎石と八幡大社と刻まれた石碑のみが残っている。

石碑のある横の平坦地(現在は畑)には、ロクロ作業や絵付けのための作業舎があったと言われている。

また、境内跡の北側に、当時使われていた井戸が残っている。

※筆者も令和5(2023)年3月1日と同年12月23日に同地の踏査を行ったが、窯跡を確認することは出来ず、窯に関連する遺物としては「障害者支援施設 三恵ホーム」北側の空き地に六基の石塔が並んでおり、その近くでトンバリの破片を確認した。

第3節 焼成期間

則之内窯の歴史について「愛媛の焼き物」で以下のようにまとめている。

川内町(現東温市川内地区)には、手あぶり火鉢・花生・徳利などの染付磁器の伝世品があり、中には年号や銘の入った物もあるが、それによって開窯された年代が判明するようなものは発見されていない。

地元には「明治五年の廃藩置県の際、地方産業発展のため、則之内の庄屋であった宇和川某が創業したが、間もなく廃された」との伝聞がある。

「陶片木」の則之内川に関する記述と総合すると、則之内焼は嘉永の初めごろ、窯場近くの安国寺の住職の出資で開窯された。窯の責任者は九谷の住人三好照治であったが、経営が軌道に乗らず明治五年ごろ地元

の庄屋宇和川家の支援を受けたが、間もなく廃窯になった。その後を千両富くじの当たった砥部の白濁秀三郎が富くじの賞金を投じて窯を引き継いだが、これも失敗に終り、明治七、八ごろに最終的に廃窯になったと考えられる。したがって筆者(吉田氏)は、則之内窯の稼働期間は、嘉永の初期から明治七、八年までの約二十年間と推測している。

また、則之内窯が当初松山藩の御用窯だったという説についての確証はないとされている。

第4節 伝世品

「愛媛の焼き物」では、久万美術館蔵「染付四君子紋手水鉢」が紹介をされている。当該手水鉢の高台には「時、明治才三年歳在庚午初冬製 於豫州浮穴郡則之内山雲山」(口径 31.0 cm、器高 40.2 cm)の銘があり、平尾儀七(雲山 1808~78)の絵付けで、則之内に指導に訪れた際のものである。※同手水鉢は『久万美術館蔵品図録』(平成 11 年 3 月発行 町立久万美術館編集・発行)には不掲載。

『同図録』には、

(井部コレクションー追加寄贈ー) 「平尾儀七絵付け染付四君子植木鉢(明治三年銘)」

(井部コレクション) 平尾儀七絵付けの「染付山水四君子紋角德利」「染付山水紋袋方掛花生」「染付菊梅紋急須」

(井部コレクション) 「明治三年銘植木鉢に非常によく似た文様の伝則之内窯染付四君子植木鉢

(井部コレクション) 平尾儀七作ではない「染付家紋入御神酒德利一対」「染付四君子植木鉢(明治三年銘)」が掲載されている。

「伊予の陶芸(五)」には松瀬川焼の開祖である渡部歌次が則之内で働いていた時に作った「染付焼神酒瓶一対」が写真と伴に紹介されていて、永田氏の解説によると、

高さは 39.5 cm、径 19cm。くびに唐草文。高台脇源氏形つなぎ紋。マルに金字の金毘羅宮の紋染付け。川内町総河内神社摂社金毘羅宮へ奉納せるもの。合成ドイツコバルト?使用、着色は鮮明な青、高台内に図版に示すような銘が書き込んである(略)「明治 七戌造 則之内ニ而 松三ノウタニ」明治七年は甲戌 「松」- 松瀬川村、「三ノ」- 三軒家の、「ウタニ」- 渡部ウタジ(歌次)が則之内の窯に来て焼成したものであることを明記している。名工佐太郎がウタジになった明治以降、唯一の記銘作品であるとされている。

第3章 則之内窯跡採集資料

製品は「一則之内 磁 1」と記されたコンテナ分(図版 1-1~25、図版 2-26~34)と「その他のコンテナ分」(図版 2-35~37、図版 3-38~41)および「寄贈者の分かる製品」(図版 4-42~44)に分かれて収納されている。

各片の詳しい観察は「東温市則之内窯窯跡採集資料観察表」にゆずり、本章では特徴のみ示したい。

染付碗は、内面は見込、口縁端部、外面は裾部、高台に圏線を持つことが共通しているので、記述を省略している。

第1節 製品(則之内 磁 1 コンテナ分)

・染付碗(図版 1-1~24)

1 は高台径 4.1 cm、器高 6.4 cmの小丸碗で、外面草花文。2 は内面口縁多重圏線(6 本)、外面口縁、草花文。3 は外面口縁多重圏線(6 本)、2 線単位の亀甲文、底部圏線 3 本。4 は内面、口縁端部は圏線(2 本)、多重圏線(4 本)、草花文、裾部圏線 2 本、高台圏線。5 は内面、口縁端部に圏線(2 本)、外面口縁部に多重圏線(6 本)、草花文、熔着痕有。6 は内面に染付小片熔着、外面口縁、多重圏線(9 本)、草花文。7 は高台径 3.5 cm、内面見込に染付片熔着、中央に蝶文、外面は草花文、高台、太い圏線。8 は、高台径 3.5 cm、内面見込 中央に蝶文、外面は、芙蓉手状区画に文様、裾部に圏線 2 本。9 は端反碗で内面口縁 多重圏線(6 本)、外面、区画線

内に水辺文、二次焼成により器面が赤化している。10は高台径3.6cm、内面、見込、圏線2本、中央に帆掛舟文。11は内面中央に帆掛舟文、外面は水辺の風景(蛇箆)が描かれる。12は高台径4.2cm、内面に降灰有り、中央に銘、外面は、区画線内に水辺の風景(蛇箆)が描かれる。13は内面、中央に銘、外面は草花文が描かれる。14は小片で、見込に蝶文がある。15は内面 口縁に点が3個ある多重圏線(6本)、外面は草花文。16は小片で、外面、草花文。17は、内面口縁、多重圏線(4本)、外面、草花文、呉須は西洋コバルトが用いられている。18は小片で、外面は草花文。19は、内側に熔着した染付片の口縁は多重圏線(4本)、本体内面 外面 手描きの草花文と型紙摺染部分が並んでいる、窯道具片熔着、呉須は西洋コバルトが用いられている。20は、内側に熔着した染付片の口縁は二重圏線で端部に太い圏線、本体の外面の口縁は縦4×横3の格子文 端部は太い二重圏線。21は、内面口縁 多重圏線(6本)、外面、区画線の中に草花文。呉須は西洋コバルトが用いられている。22は、小片で、外面型紙摺文。呉須は西洋コバルトが用いられている。23は、小片で、外面草花文。呉須は西洋コバルトが用いられている。24は、外面は21に似た草花文。呉須は西洋コバルトが用いられている。

・染付蓋(図版1-25)

蛸足ハマの上に2枚重なって熔着している。外面は成形時についた型押し凹凸がある。直線的な縞模様と変形の縞模様の組合せ、摘み外面に二重圏線。

・染付碗(図版2-26~29)

26は高台径4.0cm、内面、見込は圏線2本、中央に帆掛舟、外面、型紙摺文、呉須は西洋コバルトが用いられている。27は小片、外面、型紙摺文、呉須は西洋コバルトが用いられている。28は小片、内面 口縁、多重圏線(4本)、外面、型紙摺文、呉須は西洋コバルトが用いられている。

・染付皿(図版2-30、31、33)

30は、口径8.9cm、高台径3.0cm、内面 蛇目釉剥ぎで染付片が熔着している。外面、文様有、全体に歪んでいる。31は染付稜花皿で高台径は6.7cm、内面 口縁 大・小芙蓉文セットが4カ所 見込 圏線(2本) 中央に崩れた松竹梅文 外面 底部 高台内 蛇目状露胎 ハマの熔着痕がある。33は、内面に足付ハマの熔着痕が1カ所あり、降灰があり、文様は不明。外面裾部に圏線2本、高台に圏線あり、高台内蛇目状釉剥ぎがある。

・染付端反碗(図版2-32、35~37)

32は、口径12.0cm、口縁端部外面に菊花文を描く。35は、高台径4.2cm、器高6.6cm、内面、見込、斜めの井桁文、外面、口縁部に多重圏線(6本)、端部に太い圏線、裾部は2段の亀甲文、裾部圏線2本、内外面が2次焼成のためか赤みを帯びていて呉須も変色している。全体に歪んでいる。36は、高台径4.0cm、器高5.4cm、内面、見込、蛇目状釉剥ぎ、外面口縁端部2本の圏線、縦4本×横3本で3段の格子文。37は、高台径3.9cm、器高6.25cm、内面、口縁端部2本の圏線の中に石畳文、見込、岩波文、蛇目状釉剥ぎ、外面、口縁、笹文と草花文、裾部2重圏線、全体に歪んでいる。

・白磁稜花皿(図版2-34)

34は高台径6.9cm、内面、見込には髹が多くあり、高台内は蛇目状釉剥ぎ、釉はよく溶けていない。

・染付碗(図版3-38~40)

38は高台径3.5cm、器高5.6cm、内面に熔着した染付碗の口縁は多重圏線(5本) 本体内面の見込、中央に銘、外面 口縁 多重圏線(4本) 草花文 裾部 圏線2本 呉須は西洋コバルトが用いられている。39は、染付端反碗で、高台径は3.7cm、器高5.65、内面、口縁、多重圏線(6本)、見込 圏線2本、中央に帆掛舟文、外面、口縁、3区画に分画され、その中にそれぞれ文様を描く、裾部、圏線4本。40は高台径3.85

cm、器高 5.95 cm、上部の熔着した碗の外面裾部に圏線 3 本、本体の内面 口縁に多重圏線(5 本) 見込 圏線(2 本) 中央に帆掛舟 外面 型紙摺文 呉須は西洋コバルトが用いられている。

・染付蓋(図版 3-41)

41 は型紙摺染付で、口径 8.5 cm、摘み径 3.5 cm、器高 3.0 cm、文様は圏線以外型紙摺 内面 口縁 端部 圏線に挟まれた方角文 見込 圏線(2 本) 中央に麒麟 外面 端部と裾部の圏線に挟まれた稲束文は 3 セットあり、文様の重なり際がずれている、摘み部に圏線がある、 呉須は西洋コバルトが用いられている。

・染付蓋物(図版 4-42)

42 は伝世品で、口径 18.0cm、底径 18.2cm、器高 9.7 cm、内面は施釉、口縁端部と底部外面は露胎、外面に山水文、圏線 2 本、裾部に退化した蓮弁文をしるす、底に張り紙「則之内焼 惣田谷 渡部モミエ蔵 63.6.5」がある。

・染付蓋(図版 4-43)

43 は染付蓋で、口径は 8.95 cm、摘み径 3.7 cm、器高 2.8 cm、内面に窯道具片熔着、口縁端部に点を 2 点伴う多重圏線(5 本)、見込は圏線 2 本、中心に帆掛舟、外面は区画線で 3 分割され「扇状の文様と草花文 2 件セット」が描かれる、摘み部に圏線がある。入っていたビニール袋に「20090228 則之内窯表採 和田義雄さんから」と書かれた附箋がつけられている

・染付御神酒徳利(図版 4-44)

44 は胎土に不純物が多く半磁器かもしれない。外面に「奉」の字を記す。入っていたビニール袋には「20090228 則之内窯表採 和田義雄さんから」と書かれた附箋がつけられている。

第 2 節 窯道具

・トチン(図版 4-45)

上径 9.0cm、下径 8.0 cm、同径 6.7 cm、器高 14.3 cmである。片方が火を受けて脆い。上面にアルミナ状の泥が付く、下面に砂が付着している。

・シノ(図版 4-46~48)

46 は上径 8.2 cm、下径 6.5 cm、器高 14.3 cm、脚部内面にヘラ削りがあり、焼成は良好である。47 は体部の半分は欠損している。上径 7.2 cm、高さは 10.4 cm、脚部内面にヘラ削りがあり、上下にアルミナ状の泥が付く。釉はよく熔けて光沢がある。48 は、体部の半分以上が欠損している。46、47 と比べると器高が低い。外面に染付片が熔着していて、脚部内面にヘラ削りがある。上下にアルミナ状の泥が付く。釉はよく熔けて光沢がある。

・蛸足ハマ(図版 7-49~51)

49 は 5 脚あり 3 本が欠損している。脚長は 10.4 cm、下部中央の凹径は 1.5 cm、凹深は 0.2 cm、器高は 3.8 cm、上、下面中央に径 7.0 cm、上面脚端部に 5.0 cmの重ね焼きの痕があり、中央部よりに高台痕が 1 カ所ある。下部は施釉されているが、よく熔け光沢がある。50 は 6 脚あり、3 脚は欠損している。脚長 7.4 cm、下部中央の凹径は 2.4 cm、凹深は 0.4 cm、器高は 3.1 cmである。上面中央に 7.0 cm、下面中央に径 7.5 cm、上面脚端部 5.0 cmの重ね焼きの痕があり、高台痕も 1 カ所ある。下部の釉はよく熔け光沢があり、上部も自然釉がかかっている。51 は、4 脚あり、脚端から脚端までを結ぶ最大長は 25.7 cm、脚長 9.3 cm、下部中央の凹径は 2.5 cm、凹深は 0.9 cm、器高は 3.95 cm、上面中央に 8.5 cm、下面中央に径 8.0 cm、上面脚端部に 5.0 cmの重ね焼きの痕がある。下部の釉はよく熔け光沢があり、上部も自然釉がかかっている。下部、凹部に製作時につく布目がある。

・ハマ(図版 7-52、53)

52は、口径5.9cm、底径3.7cm、器高1.3cm、厚さ0.95cmで、上面に径3・5cmの高台痕がある。53は口径6.0cm、底径3.8cm、器高1.25cm、厚さ0.75cmで、上面に径3・5cmの高台痕がある。

・円盤(図版7-54)

54は口径5.0cm、底径5.0cm、高さ0.8cm、厚さ0.85cm、上面に3.7cmの高台痕がある。

・窯壁、トンバリ(図版7-55, 56)

55は窯癖の一部である一面が高温で溶けてガラス化している。56はトンバリ(窯構築用の耐火煉瓦)で一面に窯道具が熔着し、もう一面には高温で溶けてガラス化した窯道具が熔着している。

第4章 まとめ

第1節 先行研究の検討

則之内内窯に関する、先行研究は、永田政章氏の「伊予の陶芸(五)」本文とそこに引用された論考、吉田忠明氏の「愛媛の焼き物 則之内焼」に限られているので、それらによって則之内窯の歴史を推測してみたい。

・旧窯の時期

「砥部焼の歴史」(砥部町教育委員会 昭和44年3月20日)の「本文 沿革 砥部焼と関係のある伊予の窯場」中の「松瀬川焼、須之内焼」の項に「則之内窯の起源は須之内旧庄屋・宇田川家が幕末期に開窯、明治中期ころまで続いた」という記述がある。

吉田氏も「愛媛の焼き物」の中で「明治五年の廃藩置県の際、地方産業発展のため、則之内の庄屋であった宇和川某が創業したが、間もなく廃された」との伝聞があるとしている。

しかし、開窯にかかわる文献資料はなく、旧窯の開窯年次については判然としない。

・白瀉秀三郎の窯

「陶片僕(口) 白瀉勝一氏談」によると「明治初年、白瀉勝市の父秀三郎は千両富くじが当たったので、その金を以て、以前松山藩の御用窯で当時廃窯になっていた。須ノ内八幡下の窯を焼いたが、従事すること五、六年、廃藩による藩札下落に起因する大不景気の襲来に、遂に失敗して砥部に帰った、恐らく中止したのは(明治)七・八年頃ならん」とある。

このことから白瀉秀三郎は、「宇田川氏」が幕末に開窯し、休止していた窯を明治初年に再興し窯業を行ったと思われるが、窯の終期頃、窯積みはしたが、松割木は一本もなく、廃業したとされる。

・三好照治が焼いていた窯

「陶片僕(イ) 須之内、三軒家の一情報」の大内浅吉の談(昭和十年三月十八日)当時七十四才によると大内は(明治八、九年の頃?) 白瀉秀三郎の弟子である久谷の三好照治に白瀉の世話で弟子入りし、須ノ内へ行ったが、当時三好はその地方安国寺の住職の出資にて須ノ内で窯を焼いていたが、三好の須ノ内窯は従来の窯でなく新窯を築いたものである。

一二年の後、三好は須之内を去って三軒屋に新窯を開いたが、大内は三軒屋窯の築窯から手伝った三好の須ノ内を去ったのは、須之内へは砥部の木下榮信等が行って暫く焼いた。

・則之内窯の変遷と関係者

限られた資料であるが、則之内窯の変遷を示すと以下ようになる。

旧窯(幕末開窯 宇田川氏築窯 ※伝聞のみ)→旧窯2(明治初年 白瀉による改修)→新窯(明治八、九年頃 三好築窯)→新窯(明治二十年頃 三好が松瀬川に去り、砥部の木下榮信が引き継ぐ)→(廃窯)

則之内川に係わった人物の内、白瀉、白瀉の息子勝市(一)、窯焚きの高須賀重蔵、三軒家陶工で則之内に

来ていた渡部歌次の息子渡部久太郎の4名が「明治29年12月9日調査 職工人名簿 下浮穴伊豫郡陶磁業組合事務所」(砥部歴史資料第一集 平成9年4月26日 砥部焼伝統産業会館)に砥部焼近代化のリーダーで砥部中興の祖ともいわれる「向井和平窯」の職工として記載されている。

『砥部焼の歴史』「本文 沿革 砥部焼と関係のある伊予の窯場」(砥部町教育委員会 昭和44年3月20日)には、丹波出石の陶工平尾儀七が長男甚吾とともに愛媛に来て最初に則之内に身を寄せ、上記の作品を残し、その後、向井和平窯に迎えられたと記されている。

『WEB 出石焼 究極の「白」』(NPO 法人 但馬國出石観光協会 2024 出石焼陶友会)の出石焼年表明治38年(1905)条には、平尾甚吾は、砥部から出石町に招聘され、陶磁器の清・韓輸出品製造普及改良試験実施指導教官についてと記されていることから平尾甚吾も優秀な職人であり、指導者であったことが分かる。

以上のことから、則之内窯は砥部から離れた窯ではあるが、砥部でも一流の大規模な窯元が実質的に運営していたことが分かる。

第2節 磁器資料の検討

今回報告する磁器資料は、点数も少なく、大半が東温市教育委員会に保管された時期と経緯については不明であるが、まず現在知りえることを提示し、その資料的意については、文末に記したい。

・製品

ほとんどが染付碗で、多くが明治初めに砥部に導入された西洋コバルトを絵付けに用いている。口縁内面に多重圏線を施すもの、見込中央に蝶文、帆掛舟文を記すものが多い。

石岡ひとみ氏は「近世砥部焼磁器碗に関する基礎的研究—上原窯跡採集資料を中心として—愛媛県立歴史文化博物館研究紀要 第12号 2007年3月31日(以下「基礎的研究」と略)で、江戸時代中期から近代に至る砥部焼の生産の画期について、**Ⅰ期**(1775～1810年代) **Ⅱ期**(1820年代～1870年代前半) **Ⅲ期**(1875年以降)に分けていて、Ⅲ期の画期として明治8年(1875)に砥部にもたらされたとされる西洋コバルトの使用を挙げている。

資料には明治11年砥部にもたらされたとされる型紙刷りを施すものもある。

本窯の採集陶片には「基礎的研究」に記載された砥部焼染付の意匠と共通する見込みの「蝶文」「帆掛舟」口縁内外面の「多重圏線」など共通するものが多いが、則之内窯は砥部と関係が深い窯場であることから、製品の形状、衣装も類似していることは当然である。

磁器片の比較から(明治八、九年頃 三好築窯した時期)から(明治二十年頃 三好が松瀬川に去り、砥部の木下榮信が引き継ぎ廃窯までの時期)の遺物が多いようである。

伝世品の蓋物(4-42)、染付蓋(4-43)、ミニチュア御神酒徳利(4-44)は寄贈の経緯が描かれている。

・窯道具

窯道具は11点しかなく、いずれも同時期の他窯で見られる窯道具であり、特異なものはなかった。蛸足ハマの内5-49と50は製作時の布目痕が残っていない。これは丁寧に布目を撫で消したためと思われる。

・窯跡採集資料調査の留意点

昭和62(1987)年、佐賀県武雄市西川登町大字小田志にある甕屋1～3号窯跡の発掘調査現場を訪れた。

現地に着くと広い調査区内に3基の登窯と物原が検出されていて、膨大な遺物コンテナ収納のため2階建ての事務所プレハブに加えて2棟の倉庫プレハブが立ち並んでいた。

同窯は、陶磁史では「武雄南武系小田志窯」という名称で「松絵大甕」や「三島手大鉢」など芸術性豊かな作品が焼成されている著名な窯なので、出土品もそれらが大半を占めると思い現場に臨んだが、見せていただいた出土遺物の大半は小型の甕と播鉢だったので、担当者に「松絵」や「三島手」陶片の所在を聞くと、

示された当該陶器のコンテナはわずか1箱！！

その時の衝撃は大きく、遺物だけではなく、周囲の光景をまで、鮮明に覚えている。

昭和30年代、40年代は、窯跡での採集や個人による違法な発掘調査により獲得された陶片資料をもとに各窯の焼成器種を近隣窯跡の関連資料と比較検討することが研究の中心であった。

当時、これらの「調査」にかかわった人は、窯跡の主要生産品である「地味な日常品」を軽視し、少数の「芸術性の高い目立つ陶片」に着目して採集したため、生産量の少ない「特殊製品」が窯の主要製品であるとされてきたが、この「常識」が窯跡の全面的な発掘調査により一気に崩れたのである。

東温市教育委員会所蔵の則之内窯採集資料も56点、以前報告した西条市教育委員会所蔵の川根焼採集資料の点数は42点、両資料とも一部を除いて採集や収納の経緯、年次は不明で、これらを使って稼働時の窯跡生産品の全貌を推定することは不可能である。しかし、現在公有物として、自由に熟覧、記録調査が可能なのは上記資料だけという現実もある。

恩師の金言「考察するな、知るにとどめよ」（少ないデータで全体を語るな、データを増やし、個別の分析にはげめ）を肝に銘じ、今報告では、陶片の個別分析に注力したい。

参考文献：佐賀県文化財調査報告書 第129集 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書 (20)
内野山北窯跡 内野山北窯跡 甕屋窯跡

東温市則之内窯跡採集時期片一覧表

実測 番号	遺物名	法量(cm)			色調			焼成 胎土	その他	個 数
		口径	高台径	器高	釉の上から	呉須	露胎			
1	染付深小丸碗		4.1	6.4	7.5GY7/1	3PB4/10	N9.5/	釉がよく熔けていない 緻密	内面 口縁 端部 見込 圏線 外面 草花文 裾部 圏線 高台 圏線	1
2	染付碗	5.6			2.5GY8/1	4.5PB3/7		釉がよく熔けていない 緻密	内面 口縁 多重圏線(6本) 端部 圏線 外面 口縁 草花文 端部 圏線	1
3	染付碗				5GY8/1	7.5B4.5/2.5		良好、釉がよく熔けている 緻密	外面 口縁 多重圏線(6本) 亀甲文 端部 圏線 裾部 底部 圏線3本	1
4	染付碗				5GY8/1	5PB3/4		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁端部 圏線(2本) 見込 圏線 外面 口縁 多重圏線(4本) 草花文 端部 圏線 裾部 圏線(2本)	1
5	染付碗				7.5GY7/1	7.5B4.5/2.5		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁端部 圏線(2本) 見込 圏線 外面 口縁 多重圏線(6本) 草花文 端部 圏線 熔着痕有り	1
6	染付碗				7.5GY7/1	4B4/6		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線 染付片熔着 外面 口縁 多重圏線(9本) 唐草文 裾部 圏線(2本)	1
7	染付碗		.3.5		2.5GY8/1	3PB4/10	7.5Y8/3	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線 中央に蝶文 染付片熔着 外面 草花文 裾部 圏線(2本) 西洋コバルト	1
8	染付碗		3.5		7.5GY7/1	4.5PB3/7	7.5GY7/1	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線 中央に蝶文 外面 芙蓉手状区画内に文様 裾部 圏線(2本) 高台 圏線	1
9	染付端反碗				5Y9/1	6PB3.5/11		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁 多重圏線(6本) 端部 圏線 見込 圏線 外面 区画に水辺文 裾部 圏線 器面が二次焼成により赤化している	1
10	染付碗		3.6		7.5GY7/1	3PB4/10	N9.5/	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線(2本) 中央に帆掛舟文 外面 口縁 文様 裾部 圏線(2本)	1
11	染付蓋				7.5GY7/1	3PB4/10	N9.5/	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線 中央に帆掛舟文 外面 蛇籠文 裾部 圏線(2本)	1
12	染付碗		4.2		7.5GY7/1	3PB4/10	N9.5/	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 中央に銘 外面 蛇籠文 裾部 圏線(2本)	1
13	染付碗				7.5GY7/1	6PB2.5/4		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線 中央に銘 外面 草花文 裾部 圏線(2本)	1
14	染付碗小片				7.5GY7/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 中央 蝶文	1
15	染付碗				7.5GY7/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁 多重圏線4本(3点有) 見込 端部 圏線 外面 草花文	1
16	染付碗				7.5GY7/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線 外面 草花文 裾部 圏線(2本)	1
17	染付碗				7.5GY7/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁 多重圏線(4本) 端部 圏線 外面 草花文	1
18	染付蓋				7.5GY7/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	外面 草花文	1
19	染付蓋				7.5GY7/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内側に熔着した染付片の口縁は多重圏線(4本)、端部は圏線 本体内面の見込 圏線 外面 手描きの草花文と型紙摺染部分が並んでいる 窯道具片熔着 西洋コバルト	1
20	染付碗				2.5GY8/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内側に熔着した染付片の口縁は二重圏線で端部に太い圏線、本体の外面の口縁は縦4×横3の格子文 端部は太い二重圏線	1
21	染付碗				7.5GY7/1	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁 6本以上の多重圏線 外面 草文 西洋コバルト	1
22	染付碗				7.5GY7/1	4.5PB3/7		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 圏線 外面 型紙摺 草花文 西洋コバルト	1
23	染付碗				N9.5/	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁端部 圏線 外面 草花文	1
24	染付碗				N9.5/	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線 外面 草花文 21と同じ文様	1
25	染付碗蓋				7.5GY7/1	3PB4/10	N9.5/	良好、釉がよく熔けている 緻密	蛸足ハマの下面に熔着 同形のもので重なっている 外面 成形時の型押しにより付いた凹みがある 縞模様 裾部 圏線 摘み内 圏線 摘み外 圏線(2本)	1
26	染付碗		4.0		7.5GY7/1	6PB2.5/4	7.5GY7/1	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 見込 圏線二本 中央に帆掛舟文 外面 型紙摺文 裾部 圏線2本 西洋コバルト	1

27	染付碗				N9.5/	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 圏線 外面 型紙摺文 西洋コバルト	1
28	染付碗				N9.5/	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁 多重圏線(4本) 端部 圏線 外面 型紙摺文 西洋コバルト	1
29	染付碗				N9.5/	3PB4/10		良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁 多重圏線(4本以上) 見込 圏線 外面 型紙摺文 西洋コバルト	1
30	染付小皿	8.9	3.0		7.5Y7/1	3PB4/10	10YR8/2	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 蛇目釉剥ぎ 染付片熔着 外面 文様有 熔着物有り 全体に歪んでいる	1
31	染付稜花皿		6.7		10Y7/1	5PB2.5/2	10YR8/1	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 口縁 大・小芙蓉文セットが4カ所 見込 圏線(2本) 中央に崩れた松竹梅文 外面 底部 高台内 蛇目状露胎 ハマの熔着痕がある	1
32	染付端反碗	12.0			10Y7/1	5PB2.5/2		良好、釉がよく熔けている 緻密	外面 口縁 菊花文 端部 圏線	1
33	染付稜花皿				10Y7/1	2PB3/5	10YR8/2	良好、釉がよく熔けている 緻密	内面 足付ハマの熔着痕有 降灰有 外面 底部 圏線 高台内 蛇目状露胎	1
34	白磁稜花皿		6.9		10Y8/1		2.5Y6/3	不良、釉が熔けていない	内面 全面に放射状の霰がしるされる 外面 底部 高台内 蛇目状露胎	1
35	染付端反碗		4.2	6.6	5.5RP6.9/6.4	7.5B4.5/2.5	2.5Y5/3	釉が酸化して赤みを帯びる 緻密	内面 口縁 圏線 見込 圏線 中央に斜めにクロスする井桁文 外面 口縁 多重圏線(7本) 二重線による亀甲文 端部 太い圏線 裾部 圏線 2本 高台 圏線 二次焼成のためか器面が赤みを帯びている 全体に歪んでいる	1
36	染付端反碗		4.0	5.4	7.5GY7/1	3PB4/10	5YR6/8.5	良好 緻密	内面 口縁 端部 圏線 2本 見込 蛇目状釉剥ぎ 外面 口縁 格子文(縦4本×横3本) 端部 圏線 2本 裾部 圏線2本	1
37	染付端反碗		3.9	6.25	7.5Y8/1	2.5B3.5/1.5	10YR8/3	良好 釉は白濁している 緻密	内面 口縁 端部 2本の圏線の上に石畳文の帯 見込 圏線 蛇目状釉剥ぎ 中央に岩波文 外面 口縁 笹文と草花文 端部 圏線 磁器片熔着 底部 圏線3本 高台 圏線 製品熔着	1
38	染付端反碗		3.5	5.6	N9.5/	4.5PB3/7	10YR8/4	良好 緻密	内面に熔着した染付碗の口縁は多重圏線(5本) 端部 見込 圏線 本体 内面の見込 中央に銘 外面 口縁 多重圏線(4本) 草花文 端部 圏線 裾部 圏線2本 高台 圏線 西洋コバルト	1
39	染付端反碗		3.7	5.65	2.5GY7/1	4.5PB3/7	N9.5/	良好 緻密	内面 口縁 多重圏線 端部 圏線 見込 圏線(2本) 中央部に帆掛舟文 外面 圏線 草花文 裾部 圏線(4本) 高台 圏線 西洋コバルト	1
40	型紙摺染付端反碗		3.85	5.95	5GY7/1	4.5PB3/7	N9.5/	良好 緻密	上部に熔着した碗 型紙摺文 裾部 圏線 3本 本体 口縁 多重圏線(5本) 端部 圏線 見込 圏線(2本) 中央に帆掛舟 外面 圏線 型紙摺文	1
41	型紙摺染付碗蓋	8.5	3.5	3.0	5GY7/1	4.5PB3/7	N9.5/	良好 緻密	文様は圏線以外型紙摺 内面 口縁 端部 圏線に挟まれた方角文 見込 圏線(2本) 中央に麒麟 外面 端部と裾部の圏線に挟まれた稲束文は3セットあり、文様の重なり際がずれている 西洋コバルト	1
42	染付蓋物	18.0	18.2	9.7	5Y9/1	6PB2.5/4	5Y9/1	良好 緻密	外面 山水と蝶 裾部 花卉文 口縁端部 底部 露胎 底部に張り紙「則之内焼 惣田谷 渡辺モミ子蔵 63.6.5 寄贈」あり	1
43	染付蓋	8.95	3.7	2.8	N9.5/	4.5PB3/7	N9.5/	良好 緻密	内面 窯道具片熔着 裾部 多重圏線(5本、1対の点が3カ所しるされる) 端部 圏線 天井部 圏線(2本) 中心に帆掛舟 外面 天井部 圏線 扇とよるけ縞文3セット 端部 圏線 袋に付箋「20090228 則之内窯表採 和田義雄さんから」有り	1
44	ミニチュア御神酒徳利		3.1		7.5Y7/1	6PB2.5/4	7.5Y7/1	良好 緻密	半磁器 外面 「奉」字有り 呉須 西洋コバルト 袋に付箋「20090228 則之内窯表採 和田義雄さんから」有り	1

合計 44

東温市則之内窯跡採集時期片一覧表

実測番号	遺物名	法量(cm)	色調	焼成 胎土	その他	個数
------	-----	--------	----	-------	-----	----

		口(上)径	底(下)径	胴径	高さ
45	トチン	8.0	8.0	6.7	14.3
46	シノ	6.2	6.5		12.1
47	シノ	7.2			10.4
48	シノ				9.9

5YR3/2	良 0.5mm以下の石を含む	釉はよく熔けて光沢あり 円筒形 片方が火を受けて脆い 上面アルミナ状の泥がつく 下面に砂付着	1
2.5YR3/4	良 0.5mm以下の石を含む	釉はよく熔けて光沢有り 脚部内面へラ削り	1
2.5YR3/2	良 3mm以下の黒石、砂を含む	釉はよく熔けて光沢あり 上下にアルミナ状の泥がつく、脚部内面へラ削り	1
5YR4/3	良 3mm以下の黒石、砂を含む	釉はよく熔けて光沢有り 上下にアルミナ状の泥がつく 外面に染付碗片熔着 脚部内面へラ削り	1

		最大長	足長	穴径	高さ	穴深
49	蛸足ハマ(5本)		10.4	1.5	3.6	0.2
50	蛸足ハマ(6本)		7.2	2.4	3.1	0.4
51	蛸足ハマ(4本)	25.7	9.3	2.5	3.95	0.9

7.5YR2/2	良 5mm以下の黒石、砂を含む	釉はよく熔け光沢有り 上面 中央 径7.0cm 隣接して3.0cmの高台痕有り 脚端部に5.0cmの重ね焼きの痕 下面 中央 7.0cmの重ね焼き痕 布目なし	1
5YR3/1	良 5mm以下の黒石、砂を含む	釉はよく熔け光沢有り 上面 中央 径7.0cm 脚端部に5.0cmの重ね焼きの痕あり 下面 中央 7.5cmの重ね焼き痕 布目なし	1
5YR3/2	良 5mm以下の黒石、砂を含む	釉はよく熔け光沢有り 上面 中央 8.5cm 脚端部に5.0cmの重ね焼きの痕あり 下面 中央 径8.0cmの重ね焼き痕 底部・体部・穴部に布目有	1

		口(上)径	底(下)径	高さ	厚さ
52	ハマ	5.9	3.7	1.3	0.95
53	ハマ	6.0	3.6	1.25	0.75
54	円盤	5.0	5.0	0.8	0.65
55	窯壁				
56	トンバリ				

10YR7/3	良 緻密、白色・黒色砂粒を僅かに含む	上面径3.5cmの高台痕有	1
2.5YR6/8	良 緻密、白色・黒色砂粒を僅かに含む	上面径3.5cmの高台痕有	1
7.5YR6/3	良 緻密、白色・黒色砂粒を僅かに含む 粗い	上面に高台痕有、下面に糸切痕有り	1
			1
			1

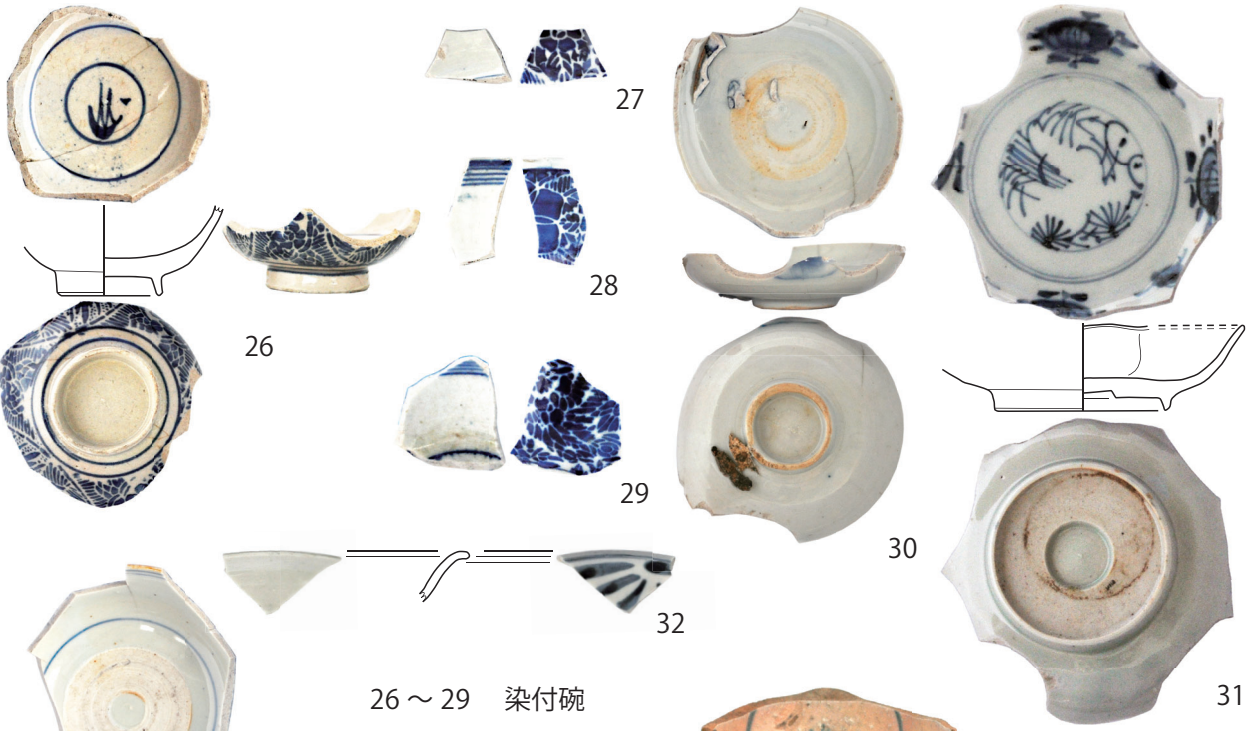
合計 12



1 染付小碗

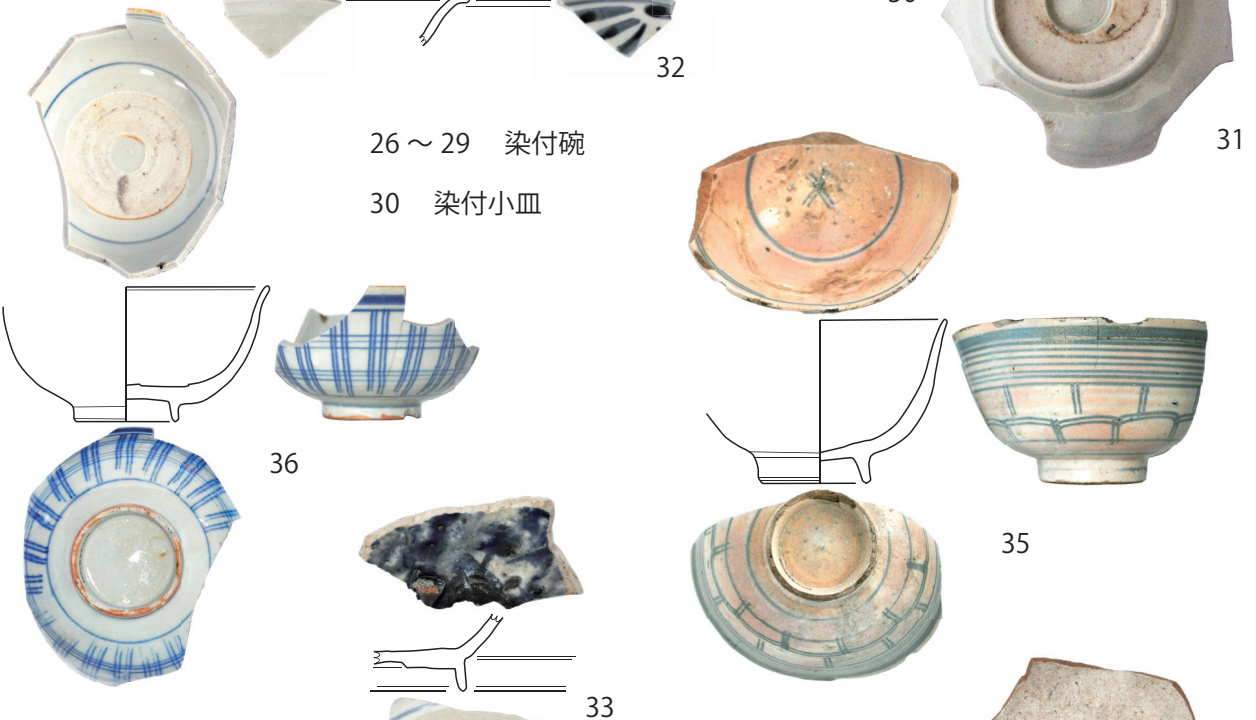
14 染付小片

2 ~ 13、15 ~ 25 染付碗



26 ~ 29 染付碗

30 染付小皿



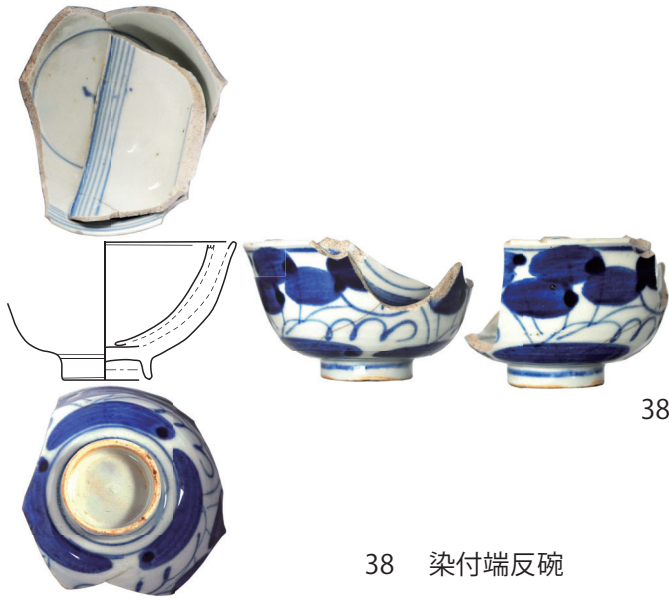
31、33 染付稜花皿

35、36、37 染付碗

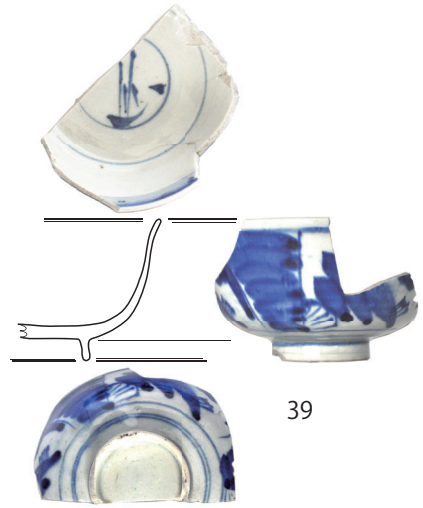
32 染付端反碗



34 白磁稜花皿



38



39

38 染付端反碗

39 染付碗

40 型紙摺染付碗

41 型紙摺染付碗蓋



41

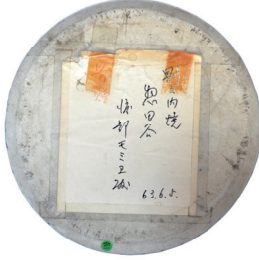


40

S=1/3



42



42 染付蓋物 (S=1/6)



43 染付蓋

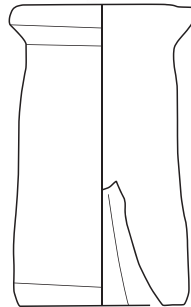
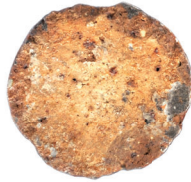
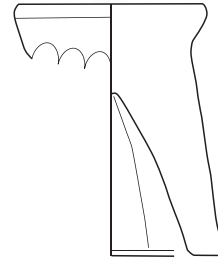


44 ミニチュア御神酒徳利

44



43



47

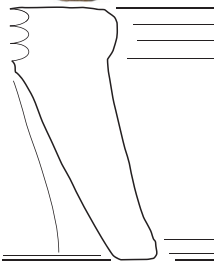
45

46



45 トチン

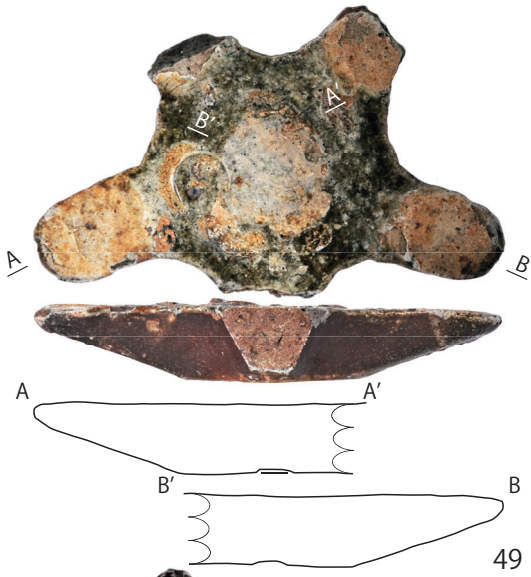
46~48 シノ



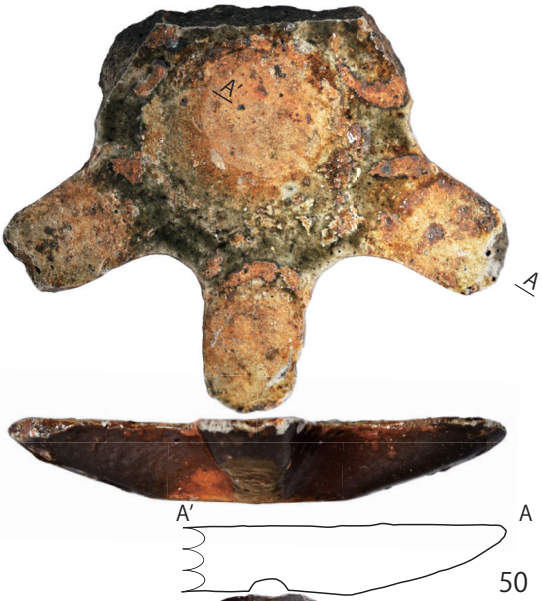
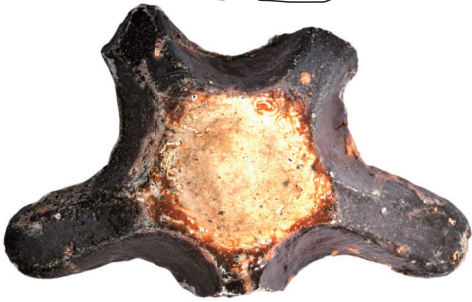
S=1/3



48



49



50



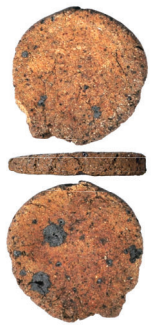
51



52



53

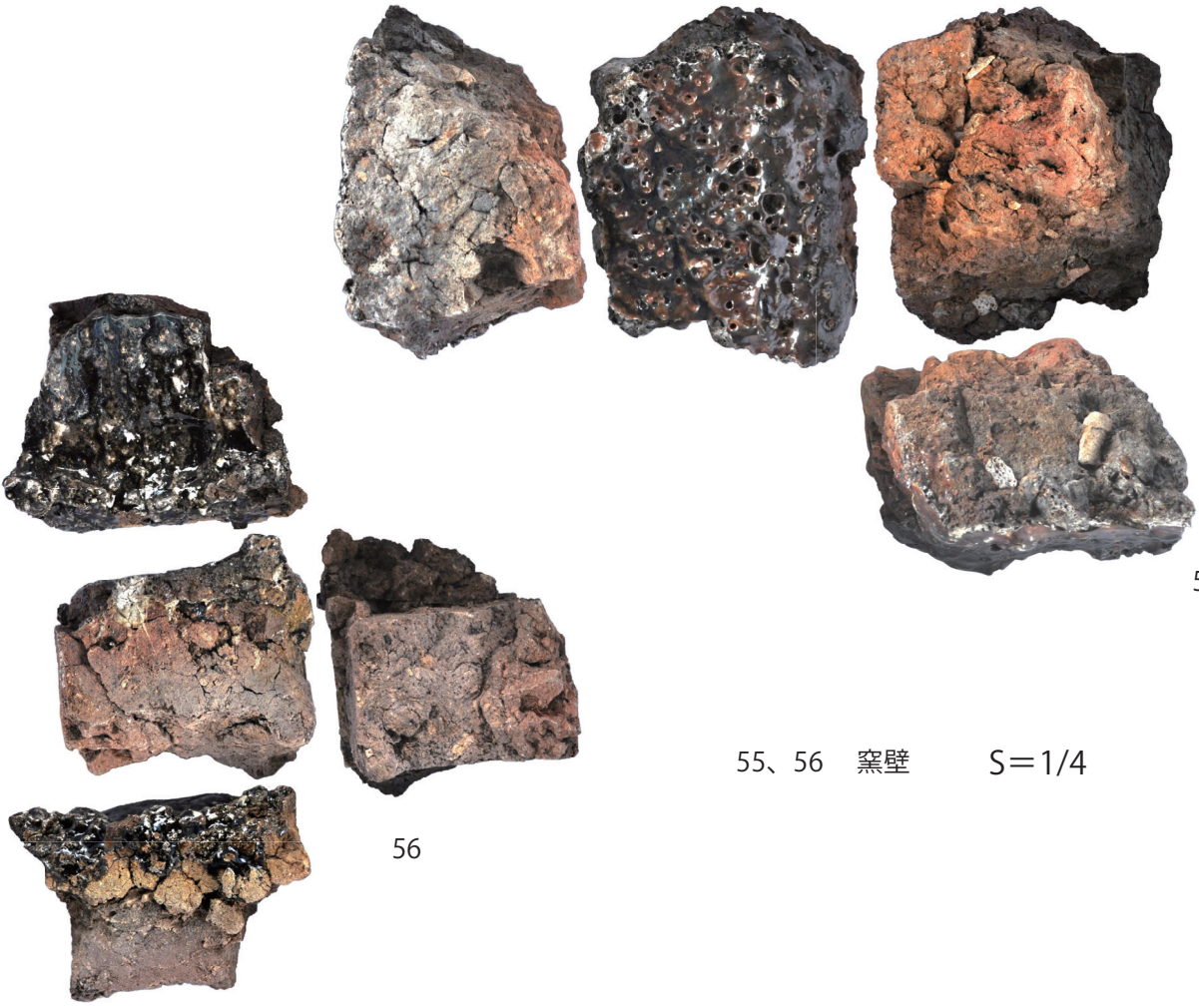


54

49 ~ 51 蛸足ハマ (S=1/4)

52、53 ハマ S=1/3

54 円盤



55

55、56 窯壁 S=1/4

56